



時間はない。

対談
後ろを振り向いている

本誌 コーディネーター

中田 宏

Nakada Hiroshi

公益財団法人日本サッカー協会最高顧問

川淵 三郎

Kawabuchi Saburo

神谷 真理子 構成・文
Text by Kamiya Mariko
森 日出夫 撮影
Photographs by Mori Hideo
取材場所 / 日本サッカー協会

サッカー界の裾野を広げる

中田 本日はどうぞよろしくお願いいたします。川淵さんで思い出すのは「芝生」のことです。

川淵 あの芝生の件ですね。

中田 私が横浜市長になつてすぐ、川淵さんに「いくらでも協力するから、小学校にたくさん芝生を植えよう」と言われました。それで、市内のある小学校に芝生を植えました。

オーブンングのとき、わざわざ来ていただきました。あのときはありがたいと思いました。

川淵 いえいえ、こちらこそ。あの後、鶴ヶ峰にある不動丸小学校も立派な芝生のグラウンドを作ってくれたんですよ。ただね、三年ぐらい経つてから電話で校長先生に芝生のその後を尋ねたら、「芝生のグラウンド？」って返ってきた。新しい校長先生に代わっていったんでしょう。芝生には興味がないという感じだったんで、頭にきちゃいましたよ(笑)。

中田 そうでしたか。

川淵 結局、学校のトップが、芝生が子供たちにとつていかに有益なものなのかをわかっていないとダメだね。ちゃんと考えていけば、メンテナンスを怠ることはないはず。今まで全国を見て回ったけど、校長先生が子供の心身の教育に熱心でない学校は、だいたい芝生は剥げてなくなつてしましますよ。

中田 今の話を聞いて、私も芝生のその後が気になりました。というのも、当時、私が学校側に伝えたのは「芝生を植えた後も、ちゃんと手入れをしてください」ということだった

れば憧れのスポーツであり、憧れの選手がいっぱいいるからだと思います。その意味で、川淵さんにとつて日本のサッカー界が一番大きな転機はいつですか。

川淵 やつぱりJリーグ発足の時ですね。Jリーグが誕生したことで日本にプロの道が開けたんでね。そして、サッカーで生きようという選手が出てきて、それを夢見た子供たちがどんどん良い指導者のもとで指導を受けるようになってレベルが上がった。設立した当時は、世界のトップリーグでプレーする選手が出てくるとは夢にも思わなかった。セリエAとかね。イタリアのリーグ、セリエAと言つたら世界一ですよ。したら、いきなりカズ(三浦知良)が行つたでしょう? 驚きましたよ。それがきっかけとなつて、Jリーグを経験してから海外を目指す選手が増え、どんどん世界に出ていくようになった。しかし、そこでレギュラーとして活躍できる選手はそうはいなくて、十年以上かかりましたね。今はドイツでもかなりの選手が活躍しています。

中田 香川、酒井など、たくさんいます。**川淵** トップの選手、トップチームでのレギュラー選手が、この十年、二十年でようやく育つてきたということでしょう。そういう意味では、高校や大学サッカーからJリーグ、Jリーグから世界つていう、その三段階のステップがあることが、子供たちにとつて大きな夢を持つことができる一つの理由なんじゃないでしょうか。

たからです。芝生を植えたはいいけれど、メンテナンスは市に頼むというのではダメだと。学校側で子供たちや保護者たち、地域の人たちも含めてみんなで手入れをするということ。条件として、それができるといふ学校にだけ手を挙げてもらうようにしました。当時の学校が川淵さんの話と同じ状況であれば、残念なことですね。その後の経過をチェックしたいと思います。

川淵 ぜひ、おねがいします。

中田 話は変わりますが、私たちの子供時代はサッカーよりも野球が主流で、ほとんどの男の子の将来の夢は「野球選手になること」でした。しかし、今や第一位は野球選手からサッカー選手に変わっています。川淵さんご自身がサッカー選手として活躍し、サッカーを日本中に広めようと尽力した結果だと思えます。その結果、日本のサッカー界の裾野が広がり、Jリーグの隆盛やワールドカップ出場につながっているとありますが、それは意図した通りでしたか。

川淵 そうですね。今おっしゃったように、昔はスポーツと言えば、野球一色でした。でも、じゃあ野球がダメな子は他のスポーツをやるかといつたらそうじゃない。野球のコーチが子供たちを全部囲い込んで他の競技をやらせなかつた時代が長く続いたんですよ。僕はそれはおかしいと思つた。当時、甲子園で優勝した中京商業高校(現中京大学付属中京高等学校)の野球部のレギュラーをはずれた子

がハンドボールをやつたり他の競技をやつたりすると、全国優勝しちゃうことがあつただよね。

中田 野球はダメでも他のスポーツで才能が発揮されるということですね。

川淵 そう。そういう子たちの中には運動能力が高い子がいっぱいいる。それを知つていたから、一つの競技ばかりやらせるんじゃないで、もつといろいろ挑戦する中で自分の好きなスポーツを見つけなければいけないかと思つていた。だから、野球はけしからんとずつと思つていたんです。そしたらね、これはつい最近の話でびっくりしたんだけど、今じゃ、サッカーがそうなるつていうんですよ(笑)。

中田 今度はサッカーが子供たちを囲い込みすぎてると。

川淵 そう。運動神経のいい子供たちがサッカーにたくさん集まつちやつて、他の競技に回つてこないつて言われてね。「ああそうか、もう野球が悪いなんて言えないな」と。だから、サッカーをやつていいる子たちにも、もつと違う競技をやらせた方がいいね。月、水、金はサッカーで、火、木、土は他のスポーツをやるといふような。協会の中でも「グラスルーツ(草の根活動)」の一環として、そういうことをやらせようと担当者たちに言つてるんですよ。

中田 それくらい、サッカーの裾野が広がってきたということでしょう。子供たちからす

中田 当初それは、選手が自発的に目指したというよりも、チェアマンだった川淵さんの、「世界に伍するJリーグにする」という世界を意識する志が伝わつたからではないでしょうか。

川淵 その気持ちはすごくありました。サッカーというのはワールドワイドなスポーツだから、日本だけで勝つた負けつたつてやつてもあんまり意味がない。少なくともアジアの中でナンバーワンで、ヨーロッパの強豪チームと対戦しても対等の試合ができるつていうのでないと日本のサッカーは世界で認めてもらえない。そのためには、チームがどうのこうのというよりも、選手が海外へ行つて一流のクラブでレギュラーとして活躍することで、日本サッカー全体のレベルが上がつていく。だから、海外へ行くことについては、いっさい文句言うんじゃないつて周りに言つてましたよ。

中田 狭い日本で争つていられるだけでは、世界では通用しないということですね。

川淵 だから僕は、カズが海外へ行くときももろ手を上げて賛成したんです。野球は当時、大リーグへ行くなつていう風潮があつたけれども、サッカーの場合は出ていけるならどんどん出て行けつて。クラブの経営者たちにもそう言つていたからね。だから、出て行つちや困るつていうことは、サッカーの場合は今までないと思ひますよ。

中田 Jリーグやサッカー協会が後押しをし



たのですか。

川淵 いや、選手に自力でやりなさいと言っていました。いかに優れた選手でも、この選手を使ってくださいと言ってみるところで、相手側が認めなければ移籍はできない。向こうのスカウティングレベルが高いから、日本のこの選手がほしいと言われてはじめて引つ張ってもらえるんであってね。こちらから能動的に働きかけるということはほとんどなかったです。だから、そうなるのを待っていたというんですか、そのとっかかりがカズだったんです。

中田 チーム名から企業名をはずすということも衝撃でした。表向きには脱企業でしたね。相当バトルになりました。独断専行だとか、名前を消すのであればスポンサーを降りるだとか言われたそうですが。

川淵 やっぱり成功するためには、失敗した例をいろいろ見てみるいいですね。たとえば、都市対抗野球っていうのは企業スポーツですが、地域の代表として出るから以前は後楽園球場が満員になっていた。というのも、企業以外の人も応援に来ていたから。ただ、Jリーグができる頃は都市対抗野球も、観客は企業の関係者ばかりだね。僕も企業人とし

て駆りだされて行つたから、このままいくとサッカーも同じになるなと思って。

中田 企業と関係者しか応援に来ないと。

川淵 それが悪いってわけではないんだけどね。やっぱり広く多くの人に愛されて、財政的にも安定したゆとりをもつためには地域にどつしりと根を降ろして、地域住民、行政、企業の三位一体の支援体制を得られることが大事。地域全体のサポートを受けることでクラブが経営的に成り立つということを目指したんですよ。当時プロ野球は巨人中心に動いていたでしょう？ 巨人との対戦においては放映権は高くなるし、アウェーの試合でもお客さんがいっぱいになるけど、他の球団はそうはいかない。

中田 そのことが問題でもあります。

川淵 そういう状態はサッカーの場合はダメだと思つた。一つのチームだけが全国区で、あとはその恩恵にあずかるというようなことでは絶対に成功しない。そういう野球の例があつたから、チームの独断で儲けられるような仕組みを排除して、みんなで利益をあげましょうというのをリーグ側で先導したんです。

中田 そのことについても読売新聞などから

とても批判されました。

川淵 当時の読売新聞の社長から、それなら別のリーグを作ると言われました。でも、野球界ならそういう脅しも効いたかもしれないけれど、サッカーの場合はFIFA（国際サッカー連盟）がいつさい認めないし、サッカー協会がすべての権限を握っているから独立しようとしたって無理なんです。だから、そうおっしゃったときに「どうぞ、ご自由に」って言つたんだ（笑）。相手も無理だつてわかつて、ムカツとしたんでしょうね。

中田 それは単に失敗に学ぶということだけではなくて、地域に根ざさなければ存続できないと考えることですよ。

川淵 もちろんです。当時はガンバ大阪も、「大阪だけに商品売っているわけではないので大阪という名前をつけたくありません」って言っていたんですよ。

中田 地域の名前もつけないということですか。

川淵 要は全国区の名前をつけたいんです。広島も名古屋も、みんなそう。だけど、そんなこと言つてちゃダメなんだ。地域に根ざすということの説明するのが大変でしたね。

中田 「狭い日本で争っているだけでは、世界で通用しません」
川淵 「財政的なゆとりをもつたためにも地域に根ざす必要がある」